

と思ったのか、公表はしなかった。

十番目は、こうした準備のうえでソルボンヌが発表した『精神論』への検閲文書である。これはラテン語で書かれているため、フランス語訳を併記した版も併せて公表された。それが十一番目、つまりここに紹介する最後の文書である。ここでも弾圧者側の戦略は一貫している。『精神論』はやはり啓蒙思想という誤った哲学の集大成であり、これまでに出版された悪書のアンソロジーだと決めつけられる。このためソルボンヌは、『精神論』の源泉と思われる作品を先に示した五つの項目毎に延々と引用している。そこにはホップズ、ロック、デイドロ、モンテスキュー、スピノザらの名も見えるが、とりわけ多く引用されるのはラ・メトリとマンドヴィルである。引用の中には的はずれに見えるものも多い。しかしソルボンヌにとって重要なのは、エルヴェシウスの思想的源泉を真剣に探求することではなく、エルヴェシウスを通じて啓蒙思想と戦うことだったのである。

以上紹介した文書と合本とされることで、古典資料センターが所蔵するこの版は極めて重要な資料集となっている。『精神論』事件は単にエルヴェシウス一人にかかわる問題ではない。出版統制権をめぐるマルゼルブと高等法院との確執、『百科全書』に敵対する勢力の動き、当時の言論弾圧の実態など、興味深い問題を多く含んでいる。そしてこの版に収録された文書は、そうした問題について様々な示唆を与えてくれているのである。（明治学院大学非常勤講師）

J. リーヴズ序説 An Introduction to J. Reeves Studies

永井義雄
NAGAI Yoshio

(1)

ジョン・リーヴズ (John Reeves, 1752?-1829) は「序説」を必要とするほどの大物思想家とは思われない。それなのにここで「序説」とするのは、一気に論じ切る準備が今の私にないからである。

私は昨年のこの『年報』の小論「イギリス保守主義の濫觴」の末尾において、リーヴズにいずれ触れると述べておいた。その責め的一端をここで果たしておきたい。

DNBのみならずその後の諸研究書においてもリーヴズの生年ははっきりしない。しかし、生年はたいして問題ではない。彼は、オックスフォードのマートン・カレッジを卒業して (1775)、1779年に弁護士資格を取得した。1791年から1年ほどニュー・ファウンドランドで裁判所判事を勤めて1792年秋に帰国した。時あたかもフランス革命が次第に流血の傾向を強めていた。1791年にはイングランドでバーミンガム暴動が生じている。1792年の帰国直後に彼は、彼の名と不可分の組織を結成している。それが、Association for preserving Liberty and Property against Levellers and Republicansであり、11月20日創設とともにその議長となった。この協会とは、その本部の所在地の名にちなんで、別名を The Crown and Anchor Association と呼ばれる。そのほかには、1800年から死ぬまで文筆家基金 (The Literary Fund) の会計担当者の一人であった。DNBはまだこのほかにも多少の経歴を書いているけれどもリーヴズを知るにはこれだけ

の経歴で充分である。しかし、DNBは、リーヴズの著作について不正確な記述しか与えていない。以下は、NUCなどから作った彼の著作目録である。

1779 An enquiry into the nature of property and estates as defined by the English law. In which are considered, the opinions of Mr. Justice Blackstone and Lord Coke, concerning royal property, London.

1783 History of the English Law, from the time of the Saxons to the end of the reign of Edward I. (Vol. I)

——Vol. II. (to the end of the reign of Henry VII.), London 1784.

——The second edition, (to the end of Philip and Mary (1558)), 4 vols., London 1785.

——2 ed., London 1787.

——2 ed., Dublin 1787

——3 ed., London, 1814-1829, 5 volumes. (Vols. 1-4, 1814. The title of the fifth volume is : History of the English law, from the time of the Saxons, to the end of the reign of Elizabeth (1603), London 1829)

——A new edwith numerous notes, and an introductory dissertation on the nature and use of legal history, the rise and progress of our laws, and the influence of the Roman laws in the formation of our own. By W. F. Finlason, London 1869.

——A new American ed., Philadelphia, 1880, 5 vols.

1789 Legal considerations on the regency, as far as it regards Ireland, London.

1792 History of the law of shipping and navigation, London. (The Goldsmiths'=Kress micro-film)

——Dublin 1792.

——The law of shipping and navigation,to the end of the year 1806, London 1807. 2 ed., with additions, of History of the law of shipping and navigation. (貴E 59)

1793 History of the government of the island of Newfoundland. With an appendix ; containing the acts of Parliament made respecting the trade and fishery, London.

Mr. Reeves's evidence before a committee of the House of Commons on the trade of Newfoundland, London.

1795 The grounds of Aldermen Wilkes and Boydell's proposed petitions for peace, examined and refuted, London. (貴A 95)

(Anon.,) Thoughts on the English Government. Addressed to the quiet good sense of the people of England, London. Letter I. (Franklin 4585)

1799 (Anon.,) Thoughts... Letter the second.

1800 Thoughts ... Letter the third.

Thoughts.... Letter the fourth.

A collection of the Hebrew and Greek texts of the Psalms : in order to account for the variances between them, and thereby establish the authenticity of the one, and the fidelity of the other, London.

1801 Considerarion on the coronation oath, to maintain the Protestant reformed religion, and the settlement of the Church of England, as prescribed by stat. l. W. and M. c. 6 and

stat. 5. Ann. c. 8, London. (Goldsmiths' = Kress Library microfilm)

——2 ed. with additions, London.

——Dublin 1805.

1802 The Holy Bible... London.

The New Testament of our Lord and Saviour Jesus Christ, London.

1805 Proposal of a Bible Society for distributing Bibles on a new plan, London.

1814 (Anon.,) Reply to the re-statement of Mr. Chalmer's opinion on the legal effects resulting from the acknowledged independence of the United States. By a Barrister, London.

(Anon.,) Two tracts shewing that Americans, born before the independence, are, by the law of England, not aliens. First, a discussion, &c., second, a reply, &c. By a Barrister, London.

——2 ed., London 1816.

以上のうち当センターが所蔵するのは、次の4種5点である。

(1) フランクリン文庫の *Thoughts on the English Government*, Letter I, 1795.

(2) ゴールドスミス=クレス文庫マイクロフィルムの *Consideration on the coronation oath*...1801.

(3) 一般貴重書の *The grounds of Aldermen Wilkes and Boydell's proposed petitions for peace*, examined and refuted, London 1795. (貴A 95)

(4) 一般貴重書の *The law of shipping and navigation, from the time of Edward III. to the end of year 1806*. 2. ed. with additions, London 1807.

(貴E 59) (これの初版が、ゴールドスミス=クレス文庫マイクロフィルムにある。)

(2)

匿名の『イングランド統治考。第一書簡』は、物議を醸した書物であった。リーヴズは、統治と行政とは、若干の例外を除いて、「全面的に国王にのみ基礎を置く」し、また、「議会ならびに陪審制というふたつの附属物は補助的で臨時的なものである」と書いた。驚くべき発言であった。歴史の歯車を一世紀以上も逆転させるような、とんでもない統治理論であった。議会は直ちに調査委員会を設置し、やがて告発した。誹毀罪である。1796年5月20日、この書物は審査され、陪審はこれを非常に不適当な出版物と認めたけれども、有罪にはしなかった。これは、妥当な結論と言うべきであろう。言論は自由であるべきだからである。

このように時代錯誤な論調であったにもかかわらず、いつの時代にも見られるように、同調者はいた。

Joseph Moser, *An examination of the pamphlet entitled Thoughts on the English Government*, addressed to the quiet good sense of the people of England, London 1796.

モーザーは、ペインたちのような「裁判にかけられたものたちが・・・統治を永久にするのに本質的に必要な部分、すなわち王政を欠落させていた」と言う。問題の著者すなわちリーヴズはこの欠点に対して十分に気づいている。「革命が前進と思っているに違いない人たち、この人たちがどんなにか熱心に共和主義原理を広めようと努めているのを知って、かれは、そのふらちな意図に対抗すべく立ちはだかったのである」(p. 2)。フランス革命はともかくとしてイングランドでは改革は挫折させられた。モーザーは、リーヴズとともにイングランドの改革者を「偽愛国者」と呼び、彼らの計画の頓座は「この島に溢れるほどに漲る良識の存在によ

ると、彼〔リーヴズ〕は祖国の人たちを祝福した」(p. 3)。

「良識」とは、君主制擁護の意識であり、共和制拒否の思想である。「良識は最も確実な武器である」(p. 8)。これは、リーヴズの書物をモーザーが要約したものである。しかし、リーヴズの核心を要約したのは次の文章であった。国王は貴族(院)も庶民(院)もなしでその全機能を果たし得る。長年そうであったし、現在でも国会の閉会中はそうである。「しかし、国王が存在しなければ彼の議会は存在し得ない。したがって、変化も減少もなく必ず存続するのは国王のみであり、われわれが法と統治との保護を得るのは国王からのみである」(p. 17)。これが、王権は人民の自然権の信託によって生ずるという当時のロッキアンたちの理論と正反対であることは言うまでもない。

「この文章は、われわれの著者〔リーヴズ〕よりもはるかにその著作における政治的攻撃が激しかった多くの人たちのなかで、相当に大きい成功を収めた。彼らは、彼を自分たちが言わんとすることを言ってくれる人、自分たちの主張の全てを言ってくれる人と考えたのである。不肖私も杞憂家(alarmists)という馬鹿げた名前と呼ばれてきた党派の一員であるが、その党派の領袖と彼を考えて、彼らは、彼の没落と党派の崩壊とにさいしては、Tedeumを歌う用意をしている」(pp. 17-18)。

「杞憂家」という訳語はおそらく適切ではない。これは、もっと鬼面人を驚かすというような連中のことである。いたずらにフランス革命の脅威に触れ回ったことを指している。これが、前述の Association に結集した連中のことであることは言うまでもない。

ジョウジフ・モーザー(Joseph Moser, 1748-1819)は、王立美術アカデミーに学んだ画家であったが、やがて文筆業に転じて European Magazine などによって創作と評論とに筆をふるった。しかし、うたかたのようにたちまちにして忘れられた作家である。それから政治評論にも筆を染め、地方裁判所の判事にもなった(1794)。リーヴズとの出会いについては DNB は何も語っていないし、そもそもモーザーが the Crown and Anchor Association に加入していたかどうかさえ触れていないけれども、時代錯誤の法曹人という点で共通する二人が1790年代の遅くとも半ばごろまでには意気投合したであろうことは推測に難くない。

モーザーの著作は次のようである。

1. Adventures of Timothy Twig, Esq., in a series of poetical epistles, 1792.
2. Anecdotes of Richard Brothers, in the years 1791 and 1792, with some thoughts upon credulity, occasioned by testimony of N.B. Halhed... of the authenticity of his prophecies..., London 1795.
3. British loyalty; or, Long live the King. A dramatic effusion, in two acts, London 1809.
4. Lucifer and Mammon, an historical sketch of the last and present century, with characters, anecdotes, &c., London 1793.
5. Moral tales:consisting of the reconciliation.... Clementia and Malitia...Charles and Maria... The best heart in the world... London 1797. 2 vols.
6. Tales and romances of ancient and modern times, London 1800-01. 5 vols.
7. Turkish tales, London 1794. 2 vols.

残念ながら、当センターはモーザーを一冊も所蔵しない。

リーヴズの『イングランド統治考、書簡第三』(1799)は、リチャード・ウッドスン(Richard Woodeson)がリーヴズを批判して議会の権限を擁護したのに対して、無罪となったリーヴズが反批判を加えたものである。しかし、紙数が残り少ないので、この論争には立ち入ることが出来ない。いま少し資料的なことを付け加えておきたい。

1. リーヴズ研究には The Reeves Collection (The British Library, Student Room) の参照が不可欠である。これの検討は彼の思想と行動のみならず多くの政治家たちとのつながり、いわば人脈を明らかにする。少なくとも1780年代の半ばには、彼は、リヴァプール卿と密接な関係を持っていた。

2. The Rev. J. Brand, A defence of the pamphlet ascribed to John Reeves, Esq. and entitled, "Thoughts on the English Government.", London 1796.

これが、リーヴズ擁護であることはタイトルに明かであるが、リーヴズの名誉革命論を「不十分」(p. 20)と批判するなど、モーザーのように単純な弁護論ではない。

ブランドは、自らが The Loyal Associations against Republicans and Levellers のメンバーと記しているが、この組織のことは分からない。リーヴズの組織と同じものではないかと思うけれども、ここでは断定は避けたい。

3. (Anon.,) Truth and reason against place and pension; being a candid examination of the pretentions and assertions of the Society held at the Crown and Anchor, and of similar Associations in various parts of Metropolis. Addressed to John Reeves, Esq., and his associates, the second edition, London 1793.

わたくしが見たのは、ブリテッシュ・ライブラリ所蔵書である。これには、著者名が Mr. Hughes とインクで書き込んであり、更に The Author of Justice to a Judge と肩書が添えてある。

この書物はリーヴズに親しげに語りかけながら、改革が所有と自由とを保証することを説く。

4. (Joseph Cawthorne,) A letter to the King, in justification of a pamphlet, entitled, "Thoughts on the English Government: " with an appendix in answer to Mr. Fox's declaration of the Whig-Club, London 1796.

これは、タイトル・ページには著者名が出てないが、序文の末尾には記されている。

5. 上に述べたウッドスンのリーヴズ批判は次の書物である。

Richard Woodeson, A brief vindication of the rights of the British Legislature; in answer to some positions advanced in a pamphlet, intituled, "Thoughts on the English Government, Letter the second, addressed to the quiet good sense of the people of England". By Richard Woodeson, D. C. L., many years Vinerian Professor in the University of Oxford. London 1799. ウッドソンはリーヴズに "Thoughts" のなかで名を挙げて批判されたので反批判するのだと述べているので、リーヴズが Letter III でウッドスンに加えたのは厳密には再批判と言うべきであろう。

6. Robert Hall, The Works, Vol. III, pp. 94-104. にも、リーヴズに対する批判的言及がある。

7. The British Library には、リーヴズに関連したビラが多数ある。[648 c 26] この中には、ペイン批判が見られる。彼にとって最大の敵であったと言うべきであろう。

8. E. C. Black, The Association, New Haven 1963. は、リーヴズの組織が「アソシエーション

の時代」を開いたと評価している。しかしもはや紙数を越えたので、稿を改めるほかない。
(一橋大学社会科学古典資料センター教授)

1991年センター日誌・報告

第11回西洋社会科学古典資料講習会

第11回講習会を下記の日程で開催し、31名が受講した。

- 10月23日 ①古典研究の動態——アダム・スミス研究の場合 田中正司
②ドイツ近代の書誌 轡田収
③フランス土木公団のエンジニアと経済学 栗田啓子
- 10月24日 ①遡及的書誌情報の計算機処理
②リカード派社会主義者たちの経済学と社会主義 蛭原良一
③Hugo Grotiusの生涯と著作 東王地輝良
- 10月25日 ①ローダーデール・コレクションの入手経過と目録化 浅賀律夫・高梨武臣
②本の要素・本の敵——古典資料保存のために 岡本幸治
③情報交換・座談会
- 10月26日 ①図書館事情 永井義雄

日誌

- 2月4日 第36回運営委員会、議題：スタディシリーズの編集について、他
- 3月30日 年報第11号発行
スタディシリーズ 発行 No. 23：レジナルド・マッケナの経済思想 神武庸四郎 No. 24：リベラリズムとオリエンタリズム——ウィリアム・ジョーンズの政治思想とインド論—— 安川隆司 No. 25：レオン・ワルラス自伝資料 御崎加代子
- 4月26日 第37回運営委員会 議題：平成2年度事業報告ならびに決算報告、平成3年度事業計画。平成4年度概算要求について。助手の採用について、他
- 6月1日 「一橋大学附属図書館資料検索サービスシステム（HERMES）」の稼働にともない閲覧および図書整理作業の電算化開始
- 7月 展示：リチャード・プライスと二つの革命
- 10月3日 第38回運営委員会 議題：平成3年度科研費による遡及入力計画について。附属図書館の電算化について。助手の採用について。スタディシリーズについて。 他
- 10月23～26日 第11回西洋社会科学古典資料講習会開催
- 11月28～29日 展示：第12回全国大学図書館研究集会見学

利用状況

期 間	開館日数	利用者数	利用冊数	見学者数
1978年3月～90年12月	3,626	5,285	29,575	428
1991年1月～12月	280	408	2,485	34
累 計	3,906日	5,693人	32,060冊	462組